その間、わたしは、好きな麻里に熟視されていることの羞恥と快感とで、からだを堅くしつづけていました。

「ごくろうさま。もういいわ」

やがて麻里が、そういいました。

わたしは、シャツや半ズボンをつけると、麻里のかいたデッサンの一枚をのぞきこみました。そこには、わたしの秘所が、興奮したそのままにかいてあるのです。

さすがに画家の父におしえられているためか、見たまま、ありのままの真実のすがたが、生き生きと描きとられているのでした。

が、わたしは、恥ずかしさで赤くなってしまいました。

「だめだ、そんなの！」

いきなり、わたしはそうおこり声でいうと、そのデッサンの一枚をむしりとって、引き裂きました。

「なにするの！　せっかくかいたものを」

麻里もおこって、わたしのからだをつかまえましたが、その右手が、わたしのうしろにまわると、すばやく半ズボンをずりさげました。

柔らかい手のひらの、つよい平手打ちを、わたしは、自分の臀に感じました。

わたしは思わず、ぶるッと身を震わせました。

子供ごころにも、わたしは、どんなに長いあいだ、このことをまちこがれていたでしょう。気の勝った、年上の美しい女からのスパンク。いま、はからずも、その条件にぴったりと適合したものをうけているのです。

わたしは心のうちに、

——麻里ちゃん、もっとぶって……もっとぶって……。

と、念じながら、彼女の打つがままにまかせていました。

ないしょごと

早熟で利発な麻里は、自分のしたスパンクが、わたしになにをあたえたかを、はやくも感じとり、そのことに性的な好奇心をもったものでしょう。それからは、わたしとふたりきりでいるとき、なにかというと、

「サ、罰よ」

といって、わたしの臀に殴打を加えるようになりました。

子どもとはいえ、おませ同士のふたりは、すでにいわずかたらずのうちに好きあっていましたが、スパンクのことを知りあってからは、これがふたりの愛のないしょごとになったようでした。

それはおもに、わたしの勉強部屋でおこなわれましたが、そこが家人にみつかる危険があると感じたときは、庭内が、幼い恋人同士の愛のスパンクの舞台となりました。

広大な庭内には、かくれ場所はいくらでもありました。築山のかげに、木立ちのなかに、夏草の茂みに、物置き小屋のすみに……。

ふだんはスタイリストであり、無邪気な麻里が、このようなときは、小さい妖婦のようにふるまいました。終始、彼女がわたしをリードしていました。

女とは、幼にして、表裏をたくみにつかいわける才をもつものだということを、わたしは、子どもながらにつくづくと知ったものでした。

そして、それだからこそ、一ト月ちかくもつづけられたわたしと麻里とのないしょごとが、ただのいちども家人に発見されることなくすんだのかもしれません。

さかしらな麻里は、平素、そんなけぶりを露ほども、わたしの父母や女中たちにみせなかったのです。

やがて、長い夏休みも、わたしにはまたたくまにおわって、麻里は、迎えにきた彼女の母親とともに、東京へ帰っていきました。

好きな麻里に去られたあと、わたしは、子